

2009年度卒業論文紹介

森井 正美

Die Rote Liste

— ドレスデン・エルベ渓谷問題から見る

世界遺産の保護と経済活動 —

本論ではドイツ連邦共和国初の世界遺産リスト登録抹消物件となった「ドレスデン・エルベ渓谷」を中心に、人間の経済活動と文化財保護の共存について論述している。

2009年6月、ドイツ連邦共和国にある1件の文化遺産が世界遺産から登録を抹消された。登録抹消を告げられた遺産はこれが2件目の事例であり、ドイツにある全33件の世界遺産の中ではもちろん初めての物件である。その文化遺産の名称は「ドレスデン・エルベ渓谷」(英: Dresden Elbe Valley / 独: Die Kulturlandschaft Elbetal in Dresden)。18世紀にザクセン選帝侯の宮廷都市として栄えたドレスデンという町は、「18世紀から19世紀の都市とその郊外の発展の傑出した見本」として、エルベ渓谷の景観美とともに2004年に世界遺産に登録された。しかし、2005年に「森の離宮橋」(Waldschlößchenbrücke)の建設計画が持ち上がり、橋の建造による景観破壊を危惧したユネスコ世界遺産委員会が、翌年、この遺産を「危機にさらされている遺産リスト」に登録した。以降、年に一度開催される世界遺産委員会においてこの物件の世界遺産からの登録抹消が議題として話し合われ、また、ユネスコ側からドレスデンに対して橋の建設を止めるよう勧告も出された。だが、住民側の主張とユネスコ側の思惑は平行線を辿ったまま折り合いがつかなかったため、約3年間の対立の結果、2009年6月25日、スペインのセビーリャで行われた第33回世界遺産委員会で、「ドレスデン・エルベ渓谷」の登録抹消が決定したのである。

ここで注目したいのは、我々人類の経済活動と文化遺産ないし自然遺産の保護活動との共存の在り方である。我々が自身の経済活動を良い方に持っていかうとすると、その裏で環境汚染であったり文化財の価値の毀損であったりデメリットが生じる。だが、だからといって経済活動を抑圧してまで文化財の保護にばかり目を向けてしまうと、我々の生活に不具合が生まれるのではないか。

そもそも、世界遺産とは何か。大前提であるこの問題について論じるために、第1章ではユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が何を目的として「世界遺産リスト」を作ったのか、歴史を追いながらその使命について言及し、「世界遺産条約」と呼ばれる「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（1972）とそれ以前の文化財保護に関する条約などを紹介した。また、第2章では、世界遺産の中でも特に著しい危機に瀕している物件が登録される「危機にさらされている遺産リスト」について述べている。第3章では、今回の最大の焦点でもあるドレスデン・エルベ渓谷について、地理や歴史などの基本的な知識を述べた上で、何故世界遺産に選ばれ、登録を抹消されたのかをドレスデンの公式ホームページや公共メディア、ユネスコの会議記録を通して見ていった。また、図表を用い、「森の離宮橋」とはどのような目的を持って建設され、どういった点がユネスコ側の提示する世界遺産の基準にそぐわなかったのかを検証している。さらに、他の事例との比較のために、第4章で過去に世界遺産から登録を抹消されたオマーン国の「アラビアオリックスの保護区」と危機遺産登録をされたドイツの「ケルン大聖堂」について紹介をした。ドイツ国内の遺産に関しては、該当する州や市、国全体の人々の反応の違いについても言及している。

ドレスデン・エルベ渓谷の問題は我々に文化財の保護と経済活動の共存について省みる機会を与えてくれた。ユネスコ世界遺産委員会がこれからもその地域が望む経済発展を遺産の普遍的な価値を守るために抑圧していくのであれば、人間の経済活動と文化財保護の活動が共存していくことは無理だろう。同時に、我々人間も自己の利益ばかりを考えるのではなく、少し視野を広げてどうすれば文化財と共存して暮らしていけるのかを再度鑑みる必要がある。ドレスデン市長オローツが世界遺産委員会に宛てた言葉を借りるならば、「[世界遺産委員会と世界遺産保有国

2009年度卒業論文紹介

及び近隣住民の」双方が共に調和しなければならない」時代が今まさにやってきたのである。